

「子どもの困難」の究極としての売春。 「私たちにできること」とは何か。

私たちは「買われた」展

2016年10月、横浜で企画展「私たちは『買われた』展」が開催された。反響を呼んだ東京展に次ぐアンコール開催だ。

主催したのは一般社団法人Colaboと、Colaboとつながる少女グループTubomi。

「困難を抱える少女が違法労働や犯罪、性搾取に行き着かなくてよい社会」をめざして、虐待や性暴力にあうなどした女子を支える活動をしているグループだ。

展示には、こんな文章が添えられていた。

売春する中高生について、どんなイメージを持っていますか？

ある大学で学生たちにそう投げかけると、こんな言葉が返ってきた。

- 快樂のため
- 愛情のため
- その場限りの考えで
- 遊ぶお金がほしいから
- 優越感に浸るため
- 自分も街で買春をもちかけられたことがあるけど、断った。
- だから、やる人はやりたくてやっているんだと思う。
- 正直、そんな人とは関わりたくない
- どうしてそこまでやれるのか、理解できない。

当事者のAは言った。

「そんなもんだよ。世の中の理解なんて。

もう、そんなことでは傷つけなくなった」

「行くところがないとき、

声をかけてくれるのは男の人だけだった。

頼れるのが、そういう人しかいなかった。

何日も何も食べていなかったから、仕方なかった」

(15歳・中学生)

「買った大人への怒りとかいうよりも、

買われる前の背景があることを知ってほしい。

家族や学校、施設で虐待されたり、ひどいことを言われたりしたことが繋がっている

そうでもしないと、生きられなかった」

(20歳・高校生)

この企画展は当事者の少女たちの証言とイメージ写真から構成されている。

証言からは、私たちの“イメージ”とはまったく異なる「売春する中高生」の姿が浮かび上がってくる。

登場する少女たちはみな、貧困やDV、性的虐待など様々な「困難」を背負っている。だが、どこからも「支援」をうけることができず、その結果“体を売る”ことに辿り着かざるを得なかったのだ。

それは極端な例ではないか、と思うかもしれない。

もちろん、詳細な統計があるわけではない。だが、評論家の萩上チキ氏が2011年に100人の売春を行っている若い女性に行った聞き取り調査が参考になるだろう。

聞き取りでは、100人のうち33人が主に親からの暴力・虐待を受ける環境で育っていた。また30人が精神疾患の病識「あり」と答えている。(萩上チキ「彼女たちの売春」2012扶桑社)

萩上氏のデータは20代・30代の調査である。まして中高生の事例ともなれば、虐待や暴力の比率はさらに高まるだろう。「私たちは『買われた』展」の証言は、けっして極端な例外を集めたものではない。

中高生の売春は「性道德の乱れ」などの問題ではなく、貧困や暴力をはじめとする「困難」の中で孤立した彼女たちが辿り着いた、究極の姿だ。



買春する男性の問題

もうひとつ、忘れてはならないことがある。少女たちを「買う」男性の側の問題だ。

Colaboの主催者である仁藤夢之さんは、こう言う。

少年法では、売春や家出を繰り返し犯罪をおかすおそれがあると認められた少年少女を「ぐ犯少年」と言い、家庭裁判所にかけ少年院に送ることができる。

……「ぐ犯少年」に対する措置はあるのに、なぜ買春するおそれのある男性や、少女を利用し違法に搾取しようとする大人たちに対しては何の対処もないのだろうか。……少女たちはまだ子どもで社会を知らず、判断能力もない。一方で、雇う側買春側は大人だ。……これは少女たちだけの問題ではない。大人が、男性が変わらなくてはならない。（仁藤夢乃「女子高生の裏社会」光文社）

「売春」は「買春」と表裏であって、むしろ男性の側こそまず第一に問われなければならない問題だ。

「私たちは『買われた』」という表題は、まさにこの本質をあらわしている。

アメリカ国務省の発行する人身取引年次報告書では、日本は「人身取引根絶の最低基準を満たさない国」に位置づけられている。これは先進国では最低レベルだ。

「性道徳の乱れ」とは、少女を買い、搾取する男性たちにこそ言うべき言葉ではないのか。

あなたには何ができますか

少女たちがそこに行き着くまでに、誰かが救いの手を差しのべることはできなかったのだろうか。

「私たちは『買われた』展」では、来場者にアンケートが配られる。その最後の項目には、こうあった。

「中高生の売春を防ぐために、あなたは何ができると思いますか？」

唐突な質問、と思うかもしれない。だが主催団体のTubomiは、「私たちは『買われた』展」の目的をこう述べる。

「売春＝気軽に、遊ぶ金欲しさ」という世間のイメージに一石を投じるとともに、そこにある暴力や、その影響を受けて生きる当事者の姿を伝えることで、子どものSOSに気づける人、背景に目を向ける人を増やしたい。（傍点は筆者）

この「子どものSOSに気づける人」「背景に目を向ける人」とは、誰なのだろう。

証言には、しばしば学校や教師が登場する。

だが証言を読み進めるうち、ぼくは居たたまれない気持ちになる。証言に登場する教師が彼女たちに投げつけた言葉の多くは、こんなものだった。

「お前のような奴が来ると迷惑だ」

「問題ばかり起こしやがって」

そんな対応ばかりではなかったかもしれない。だが、少女たちの心に残っているのは、「問題行動」を“SOS”として受け止められない教師たちの姿だ。

当然、少女たちは学校に背を向けて「温かく迎えてくれる」男の甘言に惹かれていく。だがその先に待っているのは、彼女たちを利用しようとする裏社会だ。

—私が売春していたのは、小6の11月26日から始まり、2年間です。

—“男性”は私を道具としてしか見なかった。

—「お金がないなら、稼いできてよ」友達がいなくなるのが怖かった私は従った。

—体を差し出す代わりにおにぎり一つもらった。

皮肉なことに、学校ではなく性産業が少女たちのセーフティネットだった。

彼女たちはけっして最初から売春など望んでいたわけではない。もし学校や教師がもっとこうした実態を理解し、支援につなげることができていれば、彼女たちはもっと別の選択肢を選べたのではないか……

ぼくは、こうも思う。

彼女たちの“SOS”に気づき、支援につないだ教師たちもきっといたはずだ。その場合、彼女たちは売春に辿り着くことはなく、当然その場合の証言は「私たちは『買われた』展」には登場しない。

「中高生の売春を防ぐために、あなたは何ができると思いますか？」

この問いに対する答えが、ここにある。

藤沢の教育界では「不祥事」が相次いだ。教育委員会としても、教職員の“自覚”を求めざるを得ない。

だが一方、少女買春や薬物使用などほとんどの教職員にとってはあり得ないことだ。「個人の問題ではないか」「なぜ私たちまでが厳しく言われなければならないのだ」という“本音”も、当然あるだろう。

確かに一連の事件を「教師の倫理」だけで済ませようとするれば、結局は“他人事”に終わってしまう。だが、今回の問題を自らの実践課題として「何をすべきか」を考える契機とすることはできないだろうか。

いま、学校に対して向けられる視線は厳しい。

だが、求められているのは萎縮や自粛ではない。どうか主体的な教育論議で応えてほしいと思う。